歩く死者に囲まれて

アルファー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歩く死者に囲まれて

【Ｎコード】
Ｎ２０２３Ｔ

【作者名】
アルファー

【あらすじ】
神「ちょっと俺、ホラー小説書きたいんだよね」
この一言で転生させられた主人公、『桜井　アゲハ』がほのぼのお送りするホラー（？）小説。

威風様がゾンビ視点で描いて貰っています。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４５１２ｔ／

よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初めまして！アルファーと申します。
処女作なので暖かい眼で見てやって下さい。
ではどうぞ～

プロローグ

「ちょっと俺、ホラー小説書きたいんだよね」

「え？俺？神だよ神」

「何も話していないって？そりゃそうだ、お前、魂だからな」

「んで、話の続きなんだけど、お前、『小説家になりたい』ってサイト知ってるか？」

「ああ、それだ。あれで人間のゾンビ小説見たら自分でも書きたくなっちまってよ」

「いや、別にお前の都合なんか聞いてないし。新しい人生を転生前記憶持ちでいけるんだからいいだろ？」

「ああ、せっかくの二度目の人生なんだ、楽しくやって来い。そうしたほうがネタの材料になるし・・・」

「いや？何でもねえよ。それより今考えてるのはゾンビを使って畑耕したり村作ったりするやつなんだよね。だからお前にゾンビを操れる力をやるわ」

「え？想像してたのと違う？ああ、人間サイドで武器とかぶっ飛ばしたかったのか、お前」

「残念だけどもうお前の能力とかいろいろ魂に刻み込んじゃったか

らもう遅いぜ？」

「ん？いろいろってなんだって？・・・そりゃ向こうについてからのお楽しみと言いたいところなんだが・・・すぐ死んじゃぁ元も子もないから紙に書いて一緒に送っとくわ」

「ああ、どういたしまして。んじゃあな、こっちもお前を元に頑張るからお前もすぐ死ぬなよ」

「それじゃあいって来い」

「いったか・・・さてさて、どんな物語をあいつは見せてくれるのかね？題名は・・・『歩く死者に囲まれて』だな」

プロローグ（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！
まだまだ続きます１

一体め！　ゾンビに備えよう！

初めまして皆さん。私はこの小説の主人公を勝手に押し付けられた桜井アゲハといいます。
一応挨拶ぐらいはしといたほうがいいと思う・・・これ、小説になるそうなので。
頭おかしいと思うかもしれないが、まずはこれを見て欲しい。さっき起きたときに机の上にあったものだ
。

親愛なる桜井アゲハへ

転生おめでとう！と言いたいところだがゾンビになってしまうウイルスがアメリカで伝染している。日本に第一被害者が出るまであと1日だ。その間に食料や武器を用意しろ。
あとこの家にはソーラーパネルが備え付けられているから電気には困らないぞ。頑張ってくれ！
あ、能力の事だったな。お前の能力はゾンビ支配、超回復の2つだ。

まずはゾンビ支配だが、初めからゾンビ全員を手下に出来たらつまらない。だからこの能力をレベル制にした。レベル数×2の数だけゾンビが従えられるぞ。ちなみに初めは1だ。あと、ゾンビにもレベルがあるからな。同レベルかそれ以下しか従えられん。
従えるには間接的、または直接体の部位に触る事によってできる。
これぐらいか？
もう一つは簡単に死なないための処置だ。３０分以内で死ななけれ

ば傷は再生できるぜ。

最後に俺は小説を書くためにお前の思考が分かるからな。大事だろ？主人公の感情とかは。

まぁこれから頑張って生きてくれよ。容姿とかは俺好みにしといたぜ～。

じゃあな、今度会うときは天国だ。命を大事にしろよ。

神より

……ぱっと見、悪戯だと思うがこんな家には来たこともないし窓から見える景色にも覚えが無い。そして机の上には封筒に入った５００万……

これを誘拐だとかいう奴は頭がおかしいと思う。

それに極めつけはこれまた机の上にあった新聞。一面はアメリカで集団テロ！？など大見出しで載っていた。そして日付は２０２１年９月２日。ちなみに俺の最後覚えている日付は２０１１年４月８日だ……確実に転生ですはい。

そしてこれが事実と言うことは……まずは食料をたくさん買っておこう。日持ちする缶とかを中心に。

とりあえず時間が無い。食料は1日2食ぐらいにすれば2、3年はもつか？ぐらいの量。その辺にいるホームレスとか使って荷物運ばせた。若干数名食料もって逃げたやつがいたが無視だ無視。金も倍払ったらもっと手伝ってくれた。もつべき物は金だね。

ついでに家を補強する板とか柵とかいろいろ手伝ってもらった。怪しすぎるといって半分消えていったがそのほかの人はしっかりやってくれている。ありがたい。

次に武器だが銃とかは無理。どう買えばいいのか分からないし時間が無い。金属バット、木刀、トンカチ、サバイバルナイフ、チェーンソー、包丁、鎌ぐらいが限界だった。

あと約半日。
普通の家の大きさの自宅は窓がすべて鉄柵で補強。
電気店に行き、大きい冷蔵庫やパソコンも買ったりゲーム屋に行き、娯楽のためにいろいろ買った。
現在１０時。家は補強され、家の一室は食料部屋、武器部屋に変わった。

「よし、武器は金属バットとサバイバルナイフぐらいしか役立つものはないか……明日はきっと早い。もう寝よう」

明日は地獄だ。

主人公紹介！（前書き）

ネタばれあり。全話読んでから見ることをおすすめします。
夕凪町の地理を少し載せました。

主人公紹介！

名前
桜井　アゲハ（さくらい　あげは）

性別
男

容姿
・金と銀のオッドアイ
・茶髪で１８ぐらいに見える顔立ち
・細マッチョ

能力

ゾンビ支配
・レベル数×２の数だけゾンビが従えられる。
・従えるには間接的、または直接体の部位に触る。
・支配するには最低でも２秒間必要。
・ゾンビを直接、殺せば経験値がもらえる

超回復
・３０分以内で死ななければ傷再生。

ゾンビ特徴
・レベルがある。
・力が強い
・足が鈍い
・噛まれたら感染
・頭をつぶせば即死

・味方ゾンビが感染者を生み出せば噛まれた人は味方ゾンビになる
転生日
・２０２１年９月２日
武器
・金属バット、木刀、トンカチ、サバイバルナイフ、チェーンソー、包丁、鎌など
主人公から一言
・「初めまして皆さん。私はこの小説の主人公を勝手に押し付けられた桜井アゲハです。生き残れるように頑張ります」

町の地理
町の名は夕凪町。町の中央少し右に川が流れている。
夕凪町内で川に架かっている橋の数は３つ。川は縦に流れており、橋の名前は上から「からす橋」、「夕凪大橋」、「朝日橋」。からす橋と夕凪大橋の距離は３ｋｍ、夕凪大橋と朝日橋の距離は４ｋｍ。
その夕凪大橋の橋近くに自宅がある。
西に１ｋｍにはコンビニがある。
自宅を中心に見て北方向に大型ショッピングモールがある。
南２ｋｍ先には朝日中学校。
川を挟み東３ｋｍのところに夕凪高校。
からす橋を渡り、北に２ｋｍに警察署。
その警察署よりさらに３ｋｍ行ったところに病院。

主人公紹介！（後書き）

随時更新します。

二体め！　ゾンビを従えてみよう！

現時刻５時３９分。

騒がしいヘリの音で目が覚めた。

空を埋め尽くす程の群れで飛んでいるヘリには陸上自衛隊の文字が書かれていた。

「広がるのが早いな。もしかして第一被害者が出た場所って意外と近いのか？」

ゾンビの姿は見えないが、多数の家から人が窓から上空を見上げていることがわかった。

まず必要なのは情報。ＰＣとテレビをつける。

『――北海道、千葉、広島、鹿児島から暴徒が急増しています。国民の皆さんは家からの外出を控えてください。』

まぁＴＶはこんなものか。どうせ現場は自衛隊とかが撮影を控えさせているんだろうけど……やっぱり、ＰＣのほうは抑えられないか。

暴徒と入力し、検索した結果、ゾンビの動画や画像などが出回っていた。

人間を喰らう人間。画像を見ていると不思議な現象が起こった。

「ゾンビ……ＬＶ３？」

なんというか……情報が頭に流れ込んでくる感じだ。

林檎を目の前にしてこれはなんだ？と聞かれたら「林檎」という単

語が頭に思いつく感じだ。説明が下手だがこれが一番しっくりくる。
自分のＬＶもわかるのではと思い鏡の前に立つ。
？？誰だこれ？そういえば神が容姿は俺好みとか言ってたけど……
金と銀のオッドアイ。それに茶髪で１８ぐらいに見える顔立ち。身長は１８５ｃｍぐらいか？体は属に言う細マッチョ。なんだこれ。
だけどしっかり頭の中にはＬＶ１と思い浮かぶ。

よし、容姿に関してはスルー。オッドアイとか神はこんなのが好きだったのか。

まずは今後どうするか決めないと。この力がある以上、人間のグループには入れない。
だけど……あんまり俺がゾンビを従えて人間を虐殺ってのはなぁ……
昨日いろんな人にお世話になったし、ここでゾンビと暮らして人間を救う？矛盾してる気がするなぁ。
だけど一番、最後の案がいい気がする。自分のＬＶも上げないと生き残れないし。

あーだこーだと考えているうちに外が騒がしくなってきた。
車がどこかに衝突する音やら悲鳴。

窓から外を見ると手を前に突き出しながらのろのろと歩くゾンビ。
あのゾンビは……ＬＶ１。周りも誰もいないし、いけるか？

手には金属バット。腰にサバイバルナイフをぶら下げ家を出る。
１ＬＶゾンビはゆっくりと俺の方向に向かってくる。目は白く濁っているから見えてないだろうし……音とか匂いとかに反応するのかもしれない。実は目が見えてるということもあるが。

周りを確認する。今からあのゾンビを従えるのだ。ゾンビにしろ、生存者にしろこの能力を使うところを見られるのはまずい。

「まずはバットを……」

ゾンビの頭ににバットを突きつける。

2秒ぐらいは押し付けていたが、急に手を下げ、こちらに向かってくるのをやめた。

「出来た、のか？」

能力は始めて使う。使ったという実感が無い為、いきなり近づくのはやめた。

「じゃあ……手を上げろ」

すっと両手を挙げるゾンビ。

いい年した男性ゾンビがバンザイしている。面白い光景だ。

すると声を出したためか2匹のゾンビが曲がり角から現れた。距離は8ｍぐらい。

右の女のゾンビがＬｖ1、左の男性ゾンビがＬＶ2。

神の話だと確かＬｖ×2の数を従えられる。なら仲間にしてしまおう。

現在はＬＶ1、従えられるのは女性ゾンビだけだ。

「お前は右の女性ゾンビを押さえつけろ」

命令を出すとゆっくりと女性ゾンビに向かい歩く。

女性ゾンビと我がゾンビがぶつかるが、女性ゾンビはかまわずこちらに向かってこようとする。だが我がゾンビの力が上回ったのか、ずるずると押し返される女性ゾンビ。

あっちは大丈夫だ。なら俺は左だ。

男性ゾンビと俺の距離は４ｍ。いつ襲われても不思議ではない。

「ごめんな・・・お休み」

金属バットを構え、正眼に構え、男性の頭に振り落とす。

男性ゾンビは頭が陥没。目玉が俺の足元に転がる。

殺した罪悪感とかが無いと言ったら嘘になる。なんせさっきの言葉は勝手に口からでてきたからだ。

こんなところで立ち止まってはいけない。俺は主人公なのだから。

未だに押し合いをしている我がゾンビの頭越しに女性ゾンビの肩に金属バットの先端を突きつけ、２秒。

こちらに向かうことを止めた女性ゾンビが我がゾンビに押され、遠のく。

ゾンビにもういいぞと声をかけるとやはり従ってくれる。

現在仲間にしたゾンビは２体。生き残るにはまだまだ少ない。

血で汚れたバットとそれを握る手を見ると、

頭に流れ込んで気なのはＬｖ２。

ゾンビを殺したからＬｖ２になったのか、仲間が増えたのが経験値になったのかは不明。だがこれであと２体仲間に出来る。

ありがたい。

この地獄と化した世界で生きていけるのだろうか？

三体め！　ゾンビと暴徒！

現時刻７時３０分。

２Ｌｖに上がった後はゾンビを自分の家の玄関に配置。
家に誰か来るかもしれないからな。ここが自分の拠点なのだ、奪われるような事はあってはならない。
幸いゾンビの動きは鈍いし、あと仲間に出来るストックは２体ある。
危険なことはあるまい。

まずは周辺調査だ。
とりあえず今はゾンビより狂った人間のほうが怖い。
多分周りでは略奪とか犯罪的なことがいろいろと行われているに違いないと思う。
安全確認のためにも必ず必要なのだ。

不気味なほど静かな道路を見渡し、ゾンビがいないことを確認。
次にはじめに隣の家に入る。
相当急いでいたのだろう、鍵は開いていた。
これは自分の予想だが暴徒がすぐ近くに来て、他の安全なところに避難したか、コンビニなどに食料をとりにいってゾンビに襲われた……おそらくあっているだろう。
一階にも二階にも誰もいなく、電気はつけっぱなし。
食料とかを探したかったが、安全確認が先。あった家の鍵と自転車の鍵、車の鍵（鍵穴に通し、確認済み）をゲットし、一つにまとめた。
これでいつでもこの家の車などを使うことが出来る。

次々と手当たり次第に家に侵入するが、鍵が閉まっていた。
さすがに窓を割って侵入するのもいまさらだが気が引け、無視した。
そして最後に来た家には机の上に置手紙があった。
内容は、川近くの夕凪高校に避難している。秋吉、急いでここにいきなさい。

たまたま子供とかが友達の家にでも泊まっていたのか？
だから鍵を開けておいた……と

「俺が狂った人間だったら迷わずここを襲うな」
もし、俺が大勢で略奪を繰り返すような奴だったら食料はここにあります、女もいますよっていっているようなものだ。
だがこの情報はありがたい。実は人間が恋しかったりするのだ。

だって考えてみて欲しい。いくら数時間しか経っていないとはいえ、ゾンビに命令と独り言しか言っていない。数週間すれば声を発する気管が退化しそうだ。
我がゾンビの二体は家にいるし、能力もばれなければ問題ない。

行ってしまうか？夕凪高校に……
と思ったが、すぐに止めた。第一ここが日本であることは確かだが、今いる場所もわからない。もう少し周囲を捜索して、時間をかけて行こうと思う。
なら近くを捜索し終わったら戦力の強化だな。

現時刻１０時３８分。

「これで８３匹目、ごめんな……」

約３時間、周囲を捜索した結果、この町の地図をゲットした。
そして今は８３匹目の頭を潰す。
俺のＬｖは少し前に１３に上り、男性のゾンビを１５、女性のゾンビを８体仲間にした。
我がゾンビを使って、複数で一体を押さえつける。そして最後は自分のてで片付ける。
一体倒すと音につられて他のゾンビがやってくるし、移動中の我がゾンビもなかなか五月蝿い。

そして後ろをとことこ付いてくるゾンビは……怖すぎる。
だがいろいろと便利で、落ちていた木刀や包丁などを持ってもらっている。
お前らピ〇ミンかよ。

Ｌｖに関してだが、やはりゾンビを俺自身が殺すと経験地的なものがたまるっぽい。
３Ｌｖに上がったときは爺さんゾンビの頭を潰したたきだったからな。
まぁ憶測に過ぎないけど。

なかなか遠くまで着てしまったので一旦帰ろう。帰る頃には昼時だとおもうしな。

大勢のゾンビを引き連れて帰る最中、遠くから声が聞こえた。
数名の声が聞こえる。数は3～5って所だろう。声は曲がり角から聞こえる。
ここで問題は2つ。

まずは相手の数と武器を確認する必要があるが、今顔を出せば見つかる。即ち、相手が敵か見方かわからない。

そして狂った人間、暴徒であった場合、俺は追いかけられて殺されるかもしれない。

どうすれば確認出来るか……

今いる戦力は自分を合わせ24体。戦力差はあるが、相手はもしかすると飛び道具を持っている可能性もある。
……なら、やはりこれか。

ＳＩＤＥ暴徒Ａ

「ちっ！ここも誰もいねぇ……どこかにまとまっているんじゃねえか？」
これで２０回以上侵入を繰り返したが食料も僅かしか手に入らなかった。
四人は割られた窓から道路へ出ると、また隣の家に侵入しようとした。

「ん？なんか今、あの曲がり角から声が聞こえなかったか？」
手に金属バットを持っている信也が言った。

「あ？・・・確かに音がするなぁ・・・おい、てめぇ行って来い！」
一番下っ端のバールを手にした徹を指差し、指示をした。

「また俺っすかぁ～？たまには竜哉いってこいよ」
そのまた隣の木刀を右手に、メリケンサック左手に装備している同じ下っ端を指差した。

「ば～か、お前と竜哉じゃケンカの強さが違う。いいから行って来い」
自分が両手に持っているサバイバルナイフをちらつかせるとすぐに従った。

すぐ駆け出そうとするあいつを眼で追うと、曲がり角から二人の人影が出てきた。
一人は明らかに男、しっかりとこっちを見ていた。その奥にいるの

は上手く男で隠れて見えないが髪が
長い女。仲良く手を繋いでいる。

「くくく……おい！女だ！男はいいが女は生きて捕まえろ！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ桜井　アゲハ

やはり暴徒だったか、なら殲滅だ。
確認した所、暴徒は４人で距離は２０ｍ。作戦は上手くいきそうだ。
近づく四人の足音。
そして勢いよく曲がってくる少年に俺のゾンビが噛み付いた。さっき、俺の手を握っていたゾンビだ。
そしてすぐ姿を見せる残りの三人。仲間が襲われ、一瞬の隙を見せた。
そして――

三人は背後からゾンビに襲われた。

作戦内容は小さい女性ゾンビと手を繋ぎ、暴徒の前を通り過ぎる。
そして彼女を暴徒から見えないところに配置。初めに曲がってきた奴を襲わせ、曲がってくる残りの奴らの目線を正面に釘付けにさせ

る。
残してきた残りの俺のゾンビが後ろから襲い掛かる。
結果は上手く行き過ぎるほど上手くいった。

こみ上げてくる罪悪感は無い。
やはり暴徒だったからか……それとも……

俺の心は人間のままでいられるのだろうか？

三体め！　ゾンビと暴徒！（後書き）

会話文が欲しい……
コメントなどよろしくお願いします！

四体め！　ゾンビと第一回会議！

午後１時４９分。

現在は家。

予想外の暴徒襲撃により、家に帰るのが遅くなってしまった。

帰ってくると、玄関に配置したゾンビが迎えてくれた。

うん、とても嬉しくない。

後ろにいるゾンビたちを家の周りに配置させ中に入る。

家の中に仲間ゾンビがいたほうが安心？バカ言っちゃいけない。一応神からのお墨付きだとしてもまだまだこの能力にはわかっていないことが多い。いきなり家の中であいつらが命令を聞かなくなったらすぐ俺はあいつらの仲間入り。そんなことにはなりたくない。

静かな家の中、俺は腹を満たすために冷蔵庫を開けた。

まだ電気は通っているみたいだ。自衛隊とかがそのライフラインを守っているのだろうか？？

コンビニ弁当を取り出し、レンジに放り込んだ。

昼飯を食った後、味方ゾンビを広い庭に集めた。

何故家の中じゃないかって？？

じゃあ想像して欲しい。家の中に土足で汚い物を落としながら家の中に２０匹以上・・・掃除が大変そうだ。部屋も臭うことになるだろうし。

「それではこれから第一回、ゾンビ会議を始めます！それでは……点呼！！」

「ぐわっ？」「ぎゃぁあ？」「うううううう」「……」
だめか。やはり知能は無いようだ。
しょうがない、一匹ずつ数えるか・・・

「２５、２６、２７、２８……？？」
おかしい。俺の現在Ｌｖは１３。だから２６人仲間にできるはずだ。
最後仲間にした数は２５、だから余りストックは１で合計は２５匹のはずなのだ。

「あれ～？数え間違えたか？？……２、４、６、８……お、お久しぶりです」
この格好、間違いなく昼間の暴徒４人組。
生きてる様子はもちろん無い、かといって生存者の俺を襲う様子もなし。

「仲間ゾンビが生存者を殺すと味方ゾンビになる？？」
これまた奇妙な能力を与えてくれたな、神よ。
ん？ということはストックは消滅？いや、こいつら４匹でオーバーしているしカウントされないのか？
周りに敵ゾンビがいないから試しようが無い。後回しにしよう。
そういえば何人かのゾンビがＬｖアップしていた。理由は不明。

次はこの町の地理だな。
地図を地面に広げる。すでに自宅にはマークが入っている。

「赤い丸、ここ、俺の家、ＯＫ？」

「がー」「うぅ？」「……」「ぁぁあああ」
理解……してくれたのか？
いや、なんか理解してないっぽい。
はぁ、もうすこしこいつらに知能があったらなぁ……

地図を見るとこの町の名前は夕凪町。こんな町の名前は知らない。
町のど真ん中の少し右に川、俺の家はその近く。
少し近くにコンビニがある。
少し離れているが夕凪高校、朝日中学校。
川を渡って２ｋｍの所に警察署。自宅から北方向、３ｋｍに病院。
目立つ施設はこれだけか。
そして今行くか迷っている夕凪高校。今は避難所になっているはずだ。
ここにいくか行かないかで俺の行動が大きく変わってくる。

どうしたものか……

四体め！　ゾンビと第一回会議！（後書き）

町の地理がわかりずらいですね……すみません……

五体め！　ゾンビと約束！

「人間、無抵抗の、食べる、ダメ！ＯＫ？」

「がうぅ」「ぐわぁぁぁ」「ががが」

「そこで首を横に振るなあぁぁぁ！」

午後２時４５分。
こんなやりとりが３０分。もういい加減頷いて欲しい。

「俺が、ＯＫ、出したら、食べる、ＯＫ？」

「……」
そんな悲しそうな顔をしないで欲しい。顔腐ってるけど。
でも一応は分かってくれたみたい。暴徒とかだったらいくらでも喰っていいぞ。

「無抵抗、人間、ここ、連れてきて、報告。ＯＫ？」

「がー」

「人間、見つけても、報告。ＯＫ？」

「がー」

よしよし、だいぶ物分りが良くなってきた。さすが私の手下だ。
よし、じゃあお前がここで、こいつがあっちで・・・

「がぅ？」

「ええい、動くな！……よし、こいつがここで、完成！」
作ったのは８×３余り５の４グループ。

はじめに、８人構成の３グループをＡ、Ｂ、Ｃ、残りの４人構成グループをＤと理解させた。
お分かりかもしれないが、やらせるのは家の警護と周辺の見回り。
Ａ、Ｂ、Ｃ、には実際に周辺を周って、ここから先には行かなくていい。とか、日没には帰ってくること。という命令を出した。
たった３グループのランダム見回りだが、暴徒たちには十分牽制になる。なにせ８人だからな。
Ｄには自宅の警護。玄関に２人、家の周りをぐるぐる周るようにして歩く４人。
ん？１人多いって？
じつはさっきＡＢＣと見回っていたとき、仲間にした。どうやら元暴徒の味方ゾンビはカウントされないらしい。実に不思議だ。

気が付けば時刻午後８時近く。
ああ、やっと今日が終わる……
家の中に入り、２階の自室へ。もちろん明かりはつけない。
あたりまえに明かりなんかつけたら暴徒とか暴徒とか暴徒とか目が見えてるか分からないけどゾンビとかここを目指して大集合♪することになる。
事実、窓の外を覗いても見事なる闇。生き延びるためだったらその程度の我慢は誰でもする。
この闇の中で動くのは外に配置した味方のゾンビだけ。

「ああ、人間が恋しい……」
もちろん暴徒などノーカウントだ。普通の人と会いたい。

こんな地獄で何人生き残っているのだろうか……

五体め！　ゾンビと約束！（後書き）

主人公紹介を更新しました。
分かりにくい夕凪町地理もわずかながら載せました。

六体め！　ゾンビとＬｖ

現在午前7時３５分。
俺の休日の過ごし方は午後近くまで寝ている。だがこの壊れた世の中じゃあそんなことは言っていられない。
シャーとカーテンを開けると気持ちが良い朝日が体に当たる。
実に清々しい朝だ。

「がー」
……下にゾンビがいなければの話だが。
動きやすい服装に着替え、バットとサバイバルナイフを腰に差し、一階へ。
今気づいたがもう電気はつかなくなっている。仕方が無いが今後は太陽光で作られた電気を使用するしかないだろう。
すると気になるのは水だ。蛇口を捻ると……まだ水は出るようだ。水だけで一週間は生きていけるとかいうからな。頑張れ、自衛隊。

「うがー」
外から声が聞こえる。ゾンビたちには家には入らぬように言ってあるからな、なにかあったのだろうか？
玄関を開けると・・・味方ゾンビ最高Ｌｖ８のよく俺になぜか『うがー』と言ってくるゾンビだ。
手に持っているのは人間の手。
いや、確かに人間を連れて来いとは言ったけどまさか人間の部位を持ってくるとは。
見ると庭にも高く人間の上半身やら腕やら足が一塊に高く積まれていた。

「……いや、それはいらないから食べちゃいなさい。あと生きてい

る人間を連れてくること、わかった？」

「うがー」

腕を貪り食べ始める味方ゾンビ。今いるのはＡとＤのグループなので１４体のゾンビがおいしそうに人間の部位を食べた。

訓練された人とかだったらこの光景も少しは楽かもしれないが、アゲハはじっとその光景を見ていた。

なぜならゾンビのＬｖがあがっていくのだ。

人間を食べるとＬｖが上がる！？それならあのときの暴徒を食べた時上がったのに理由になる。

「ゾンビを強くするには人間の肉という訳か。また面倒くさいルールをつけたな」

他にもＬｖが上がる条件があるかも知れないが、いずれわかることだろう。

とりあえず俺はやらなければならないことがある。

そう、朝ごはんだ。大事だよね、朝食をしっかりとるって。

午前８時１５分。

今日はちょっと学校へ行ってみようと思う。いつか行くかもしれなから下見を込めてだ。
味方ゾンビはＢＣＤはもともとの仕事を、Ａは俺の後ろ２０ｍをずっとキープさせている。
自宅周辺なら若干だが安全だ。地形も少しなら理解している。だけどここから行くところは地図はあるがゾンビに追いかけられながら地図を広げて逃げ回るなんてまっぴらごめんだ。

目の前には夕凪大橋。当たり前に夕凪大橋は目立つ。ここを暴徒が見張っているかもしれないが、どこの橋も目立つ事には変わりない。
周囲を見、誰もいないことを確認し走り抜ける。
たった１０ｍの橋だが酷く長く感じた。

いつ死ぬかわからないこの状況だがやっと人に会える。
ここから残り３ｋｍ。気をつけていこう。

だが、ちゃんと高校には生存者がいるのだろうか……

七体め！　ゾンビと生存者……？

「え？何これ怖い」

現時刻８時５０分、夕凪高校前なのなだが……誰かが生き残っていても、助け出すのは不可能に近い。
まずは外、３０００体ぐらいはグラウンドの校舎入り口に集まっている。
１、２、３階は窓の色が黒。完全に隙間なくゾンビで埋まっている。
４，５階は誰もいない。だがここにゾンビが集まっているということは生き残りがいるのだろう。
何人生き残りがいるのかはわからないが高校の食料はそんなに多くないだろう。そう何日ももたないかもしれない。

「なるほどなるほど、Ｌｖ１９にＬｖ２５……Ｌｖ４３。どうやらここはラストダンジョンのようだ。助けようとしたら１分で仲間入りだな」

Ｌｖ４３の奴に関しては金属バット喪ってるし……武器を持ったゾンビなんて見たことがない。
もしかしたら武器を使ってくるかもしれない。見たところあの中で最強なのはＬｖ４３のあいつみたいだ。
折りたたみ式の双眼鏡を胸ポケットにしまい込み、味方のゾンビ達に言った。

「……総員退避！」

午前９時２５分。
無事総員退避しました。え？意気地なし？あんなの目の前にしたら誰だって逃げ出すわ。
どぷやら夕凪町の半分ぐらいの人があそこに集まっているらしい。
あちらの最高Ｌｖは４３。こっちはＬｖ８。
……無理ですよ、わかってやって下さい。

「これからどうしようかな……」
いくら生存者が恋しくてもあんなところにわざわざ会いに行くのはごめんだ。
今日は何もすることがないないからゾンビ狩りにでも行きますか。

はやく強くならなければ

七体め！　ゾンビと生存者……？（後書き）

今回短めです。スランプ突入しました。
そして今回もまともな人の出番なし。
いろいろとすみません。

八体め！　ゾンビと敵？

午前９時３０分。
あの夕凪高校に行った日から5日経っている。
夕凪高校に引き付けられてゾンビが少ないため、８体のゾンビとしか遭遇しなかった。
本当ならゾンビの少なさに喜ぶのだが、生存者がいる夕凪高校から人がいなくなるとここの家にあの大群がやってくるかも知れないと思うと無理をしてでもＬｖを上げたほうがいい。
実は現在自分のＬｖ１８で3日前から5Ｌｖアップしている。理由なんて簡単だ。ゾンビが少ないためここら周辺に暴徒が集まってきたのだ。そしてこの大きくて強化された家を奪おうとする暴徒が増えた。実際に3回襲われたしな。家の外では1回だ。

そしてゾンビの数だが、Ｌｖ×２の数の３６匹のうち３０匹と暴徒ゾンビ１９匹合わせて４９匹が支配下になっている。
グループ分けだが、Ａ～Ｄまでは今までどうりで、それに新しい部隊を作った。
それは監視部隊だ。
この家の近くにある夕凪大橋の監視に3匹。
そしてＡ～Ｃグループにも監視役として1匹を投入した。仕事は戦闘があった場合、全滅を防ぐために戦闘を離脱。そして監視役以外全て全滅したら俺に報告をしに家に帰ってくるという仕事だ。
全滅したら全滅した場所がわからなくなるからな。
Ｄには2匹。見回り1匹に入り口の見張り1匹だ。
そして残りの１１匹投入し、Ｅグループを作る。
暴徒ゾンビはＬｖが低いから人数を増やしたのだ。

そして今日、いや、昨日から事件が起きていた。

「これより第二回ゾンビ会議を始めます！」
Ａ～Ｅのリーダー（グループの中で一番Ｌｖが高いゾンビ）を収集した。
だがＣグループのリーダーはいなかった。

「あー」

Ａのリーダーが返事をした。この男ゾンビは味方ゾンビ内では１番Ｌｖが高く、１２Ｌｖだ。今もそうだが、なぜか最近返事をして欲しいときに返事をしてくるのだが偶然だろうか？

「そんなことより……昨日の夜にＣグループの監視役が単独で帰ってきた。そして今日も帰ってきていないとなると・・全滅だろう」

ゾンビはゾンビを襲わない。俺が命令すれば襲うが、俺がいない時には生存者の排除、又は連行そして報告だけを命令している。よってゾンビの仕業とは考えられない。

地図上に黒で描かれた丸と赤い×印と青い×印。黒はゾンビのＡ～Ｃの見回り地域。自宅を中心として半径４ｋｍ。赤はここの家で青が全滅した場所だ。

「今までの暴徒なら数体の犠牲ですんだが、朝見てきたところ現場にピストルの弾が落ちていた」
銃ならここでも聞こえるはずだから使わず全滅させたということらしい。かなり余裕があったみたいだ。

「単に人数が多かったか、少数精鋭なのかどっちかということか」

人数が多いならなんとかなるが、精鋭は困る。理由はそんな強い人なら鈍いゾンビなどいくらでも殺せる。

「くそっ、情報が少なすぎる……」

だがなぞの敵の存在は怖すぎる。無視できるほど相手は弱くない。

アゲハはゆっくりと眼を閉じ、作戦を考え始めた。

この強敵に勝てるのだろうか……

九体め！　ゾンビと強敵

午前１２時５分。
現在、全滅した場所からそう離れていない民家から見張っている。
現れたのは車。軽装機動車？とでもいう物かもしれない。車には機関銃が取り付けられている。
そこまで銃器には詳しくはないがそれぐらいはわかった。

「まさか……自衛隊なのか？でも暴徒があの車を手に入られるか？」
自衛隊だったら厄介すぎる。銃器を持ち、訓練された兵士に俺と数だけのゾンビに勝ち目は薄いだろう。
車は４人乗りで常に１人が車の上から上半身を出し、見張っている。
格好は迷彩服だ。
そして手には拳銃。

「見張りに拳銃？拳銃じゃ飛距離とかも他の銃器に比べたら少ないはず。もしかして拳銃以上の武器がない？」
いや、決断するのは早い。あれが敵を油断させるための罠だとしたら危険だ。

走り去る軽装機動車を見ながら耳を済ませる。
さて、ここで問題だがＣグループを全滅させる理由は何か。わざわざ８体もいるゾンビを倒すなど体力の無駄。
答えは近くに拠点があるということだ。
まぁただ単にいたから殺したみたいなことも無いとは言えないが、そうならばまたここに来る必要は無いだろう。
音が消えた方角を大体確認し、ゆっくりと向かった。

大して大きくない家の前に見張りは1人。やはり腰には拳銃。やはり武器が無いのか？
相手の人数がわからないため、うかつに動けない。後ろにはAとEグループを待機してある。

ここでまたあの囮作戦を実行してみる。
何食わぬ顔で自衛隊の前を通り抜ける。距離は30m。
ちらっと確認すると、トランシーバーを手に取り、何かを話していた。もちろん銃口はこちらに向いている。
打たれると危ないから早足で自衛隊の視野から消える。そして近くの家に入った。
もちろん安全は確認済み。しっかりと鍵と家に配置していたゾンビを使い、家具を玄関に置き、バリケードを作った。
二階へ行き、ベランダから道路を見た。見ると綺麗に1列で走ってくる自衛隊が3人。やはり手には拳銃、そして腰にはサバイバルナイフや警棒。

ここでわざと自衛隊に見えるように姿を現す。
銃口は向けられるが撃ってこない。すぐに身をまたベランダの撃たれない位置に隠れる。
タッタッタと下から足音が聞こえ、続いてガチャガチャと玄関のドアノブを捻る音が聞こえる。

実はランダムでこの家を選んだわけではない。このベランダから下を覗くと自衛隊の脳天が見えるのだ。2人はドアノブを破壊したところで、1人はその少し後ろから銃口をこちらに向けて警戒している。

「行け」
軽く命令すると5体のゾンビがベランダから下に向けて落ちていった。

「うわぁぁぁあぁぁぁあ！」

パンパンと2発の銃声。どうやら後ろの1名を殺したようだ。そしてここでもう一つ命令を下す。
「押せ！」
1階に向けた言葉。この命令でドアを開けた2人にタンスが襲う。なかなかの重量のタンスが2人を押しつぶし、動きを封じた。どうやらいきなり発生したゾンビに銃口を向けていたらしい。

安全を確認した後、玄関にいる2人に近づいた。
どうやら気を失っているようだ。いくら鍛えているからといって後頭部にタンスの1撃。気絶するのは無理も無い。
そしてもう1人の自衛隊を見るともう仲間入りしていた。懐を弄り、拳銃と腰にあったスタンガンを回収する。
ちょうどいい。伸びている2人がいつ起きるかわからないからスタンガンを押し付け、また気絶させる。

「ぐぴゃ！」

……どうやら完全に気絶したようだ。可哀想だからタンスをどかし、縄でしっかりと縛る。2人からも拳銃と警棒、スタンガンを回収。手に入れたのは拳銃3丁に弾倉が3本。スタンガン2個、警棒1本にサバイバルナイフが2本。そして
トランシーバーが2つ。
拳銃はもちろん使ったことが無い。エアガンなら使ったことがある

のだがもう銃がすごく怖い。
一応腰に挿しておこう。これだけでも十分牽制になるしな。
味方ゾンビの損害は1。運悪くあの2発のうち1発が頭に当たっていた。
……また再編成をしなければ。

一応拳銃を構え、あの自衛隊の拠点に近づく。
ゾンビを先に家に入り込ませ、戻ってくるのを待つ。
するとすぐに戻ってきた。どうやら安全のようだ。
一応警戒し、ゆっくりと1階を見回る。中は物が散乱し、ひどい有様だった。
1階は完全に安全。2階へ向かう。
2階には扉が3つ。そのうち2つは開いており、中が完全に見えた。
そして最後の1つ。ゆっくりと扉を開け、中を覗く。

「「え？」」

自衛隊と眼が合った。体はロープで縛られている。

どういうことだろう……？

九体め！　ゾンビと強敵（後書き）

銃器系の知識がまったくありません。
この武器間違ってるよなどこの武器をもっと使ったほうがいいなど
があったらアドバイスください！
よろしくお願いします。

十体め！　ゾンビと自衛隊

「「え？」」

中にいたのはやはり迷彩服を着ている自衛隊がいた。

「他の自衛隊員はどうした？」

２０代後半ぐらいだろうか？日本人としては珍しくない黒髪の自衛隊員が聞いてきた。

「えっと……日本語通じるか？」

俺の容姿は日本人離れしてるしな、外国人に見えてもしかたがない。

「ああ、大丈夫だ。だがまずはこちらの質問に答えてもらいたい。状況は理解しているだろう？」

すっとサバイバルナイフに手を伸ばし見えるように柄を握る。だが自衛隊員の顔は一つも変わらない。俺みたいな少年が人を殺すわけが無いと思っているのかそういう訓練を受けているのかはわからないが、わめかれるよりかはましだ。

「まずはお前の名前、次になぜ今の状況になったかの説明」

「オレは陸上自衛隊一等陸士、白石空也だ。この状況になってしまったのはオレのミスだ」

このときだけ顔が暗くなった。

「そこを詳しく言え」

「……あのウイルスが日本に上陸した日から俺たちは東京の重要ポイントやライフラインを護り続けた。だがあんな数のゾンビに勝てるわけも無く仲間も減り、士気もどん底だった。そしてあいつらは夜、こっそりと銃を武器庫から大量に奪い、逃げ去った。そのときたまたま見回りだったオレに見つかり、オレをもしもの時の為に人質にした」

「武器の数がおかしい」
そう、あいつらが装備していたのはろくなものじゃなかった。車についている機関銃は別だが武器庫にあったものが拳銃だなんておかしい。

「ああ、実はあいつらはもともと6人組みだったんだ。だが多分昨日、仲間割れをしてその片方が武器を持って逃げ出したんだ」

なるほど、それならありえる話だ。まぁ証拠がないから疑うしか出来ないんだけど。

「よし、なら次だ。あの3人組は俺が殺した。どう思う？」
一瞬眼に浮かんだのが疑惑、混乱、そしてわずかに怒りと悲しみ。

「そうか、死んだか……1度あいつらは銃を向けたんだ、どうも思ってないといえば嘘になるがしかたがないと思う」

ちょっと待っていろと白石に言い、部屋を出る。廊下にはA、外にはEが配置されている。
さて、これで白石の人間性を計る。
ここまでの白石の答えや考え方はまともだ。一緒に行動が出来るかもしれない。
しっかりと見定めなければ。

再度部屋に入り、白石の前に座る。
「さて、次で最後の質問だ」

パンパンと手をたたく。これが合図になっている。
手を叩くと、部屋のドアからドンドンと叩く音が聞こえる。
そうこれは見ず知らずの人と隣りあわせで目の前には危険が迫っている、こんな状況でどう動くかというテストだ。

「くっ！君！この縄を解いてくれ！私が戦う」

ちなみに俺はあまり演技などがうまくない。だからちゃんと声も出さないし腰が抜けたように地面に座っている。もちろん顔が見られないように白石の斜め右前をキープしている。

さて、最後の仕上げだ。
ドンッろ音とともになだれ込んで来るゾンビたち。もちろん見方ゾンビだ。

「くっ！」

必然的にゾンビが襲うのは近いほう。この場合俺なのだが・・・

ドンッ

ぐるぐる巻きの状態で俺にタックル。俺はゾンビの最優先順位から2番目に変わり、そして白石の首にゾンビの牙が……

「ストップ」

お、お、お、……まともな人だ！

……いや、まともな人だがこんな奇妙な能力を持っていると知ったら、まともがゆえに銃口を向けてくるかもしれない。まだ気は抜けない。

だがこの壊れた世界で初めてまともな人と出会えました。

十体め！　ゾンビと自衛隊（後書き）

まともな人がやっと登場しました。若干ですがやっと会話文が増える予定。
それとオリジナルキャラクターを募集しています。出来れば陸上自衛隊、小学生、中学生、高校生、大学生、教師、警察官、一般人の中から選んでくれるとありがたいです。
名前、身長、体重、血液型、性別、大体の容姿、なくてもいいですが口癖や一人称などあると使いやすいです。
未記入があった場合はこちらが勝手に書いてしまうかもしれませんがご了承ください。
応募は小説の感想より応募してください。

十一体め！　ゾンビと目標！？

「さて、説明をしてもらおうか」

現在絶賛正座中の自分とＡグループリーダー（１３Ｌｖ）のゾンビ。
そして仁王立ちの陸上自衛隊員、白石さん。
あれ？なんで自分以外の命令を「せ・つ・め・い」

「うがぁぁぁぁあ！！」

「……しますからもうアイアンクローを止めてください。ほら、こっちのゾンビなんか泡吹いてますし」
まぁそうだよな、だってゾンビに襲われたと思ったら隣の男の一言でゾンビの動きが止まったんだからな。だが困った、神から転生させられたなんて狂った奴と思われても不思議じゃないし……

「そんなに言い難い事なのか？」

さらに警戒をする白石さん。しょうがない、心苦しいが若干ぼかしながら話すか。

「実は……」

「……というわけです」
神のことと転生は完全に伏せた。言ったのは能力のゾンビ使役のこととゾンビのこと。あとはささいな個人情報を少し。

「それじゃあまだ他にも味方ゾンビが？」

「はい、今は一人殺られたから４８……じゃなくて５１です」
訂正理由？それは迷彩服を着たゾンビが３人が廊下にいたからだ。
ごめん、食べちゃダメって事伝え忘れてた。

白石さんが廊下に見えた陸上自衛隊員の姿に顔をしかめて見ていたが、すぐに元に戻った。意外と敵には容赦が無いのかもしれない。

「５１か、それが限界なのか？」

「いえ、今はあと６体ぐらいだったら大丈夫です」
実は白石さんにＬｖのことは話していない。だってややこしくなりそうだったからだ。

「そうか、なら今は動くべきではないな……」

ん？何か小さな声で言ったような……気のせいか？？

「それで、何か今はすべきことはあるのか？」
するべきこと、か。
「とくには無いです」
まともな人にも会えたし、しいていうなら死なないための戦力増加か？
「なら、人を集めないか？」
「人を、ですか」
何度も言うが、この狂った世界ではまともの人は少ない。略奪、殺し、強姦に走る奴が後を絶たないからだ。
「ああ、より多くの人を救え。オレ達を命を懸けて護ってくれた上官の遺言だ。まぁ犯罪まがいの事をしてる奴には容赦しないがな。それが人を救うことに繋がると思うしな」
なるほど、武器を向ける者には容赦はしない、か。薄々感じていたがここまで俺と性格が似てるなんてな。
「そうですね、じゃあこころで一番生存者がいる場所に行きませんか？あの銃もあるし、大丈夫だと思いますよ？」
あの銃とはもちろん機関銃のことだ。
「ああ、そういえばなんかこいつがなんかそんなこと言ってたな」
陸上自衛隊員のゾンビを指を指し、言った。
「ええ、そうです。そこです」
魔の巣窟、ラストダンジョンの――

「「夕凪高校」」

新しい目標。より多くの人を助ける為に主人公は動く。

十一体め！　ゾンビと目標！？（後書き）

おそくなりました！！
そして次回！ついに募集していた新キャラが……！？

ハードルを下げてお待ちください。

十二体め！　ゾンビと戦い

午前９時３０分。
俺と空也さん（本人がそう呼べっていった。）は夕凪高校前に来ていた。
あの目標を決めた日から１日を費やし、鉄板や鉄網を貼り付け、若干防御力がアップした軽装機動車。それを３体のゾンビが押している。だってここまでくるのに乗っていたら五月蝿いしガソリンの無駄じゃないか。

車の周りには味方ゾンビ３８体と元暴徒味方ゾンビが１７体の計５５体。
昨日のうちに１Ｌｖ上げ、現在１９Ｌｖの自分。ストックを全て使い、家の防御役の５体以外の戦力を全て連れて来た。
銃器は機関銃と拳銃３丁。この戦力でラストダンジョンを突破しなければならない。

夕凪高校のゾンビ集団は相変わらず多く、以前無人？だった４、５階の窓もも黒く染まっている。
多分生き残りは屋上にでもいるのだろう。

「準備はいいか？」

無論、良くないが腹を括るしかない。
「……はい！」

「じゃあいくぞ……３、」

「２」

「「1」」

「GO！」

ズガガガガガ！

GOの掛け声と共に機関銃を連射する空也さん。狙いは3階と4階の壁。

連射をし続ける空也さんに、狙いの壁は呆気なく崩壊。その中からわらわらとゾンビ達がこちらに向かい崩壊した壁から飛び降りて行く。

落下の衝撃で死ぬゾンビ。だがそれが続けばゾンビの死体がクッションになり、死ぬゾンビが少なくなった。

しかしそのゾンビにもさらにゾンビが上から落下してくる為、身動きが取れなくなる。

この瞬間を待っていた。

左手を上げ、数秒。

そして手を――――振り落とした。

「行け！」

「うがーー！」

「ががががががあが」

「うううう」

「りょ……うかい」

ゾンビの豪腕から放たれる物、『火炎瓶』

それがゾンビの山に向かい投げられた。

火炎瓶はゾンビの山に命中。炎に包まれながら向かってくる奴もいるが、どれもここまでくるまでにひざを突き、動かなくなった。

ここまでは順調。ここで未だに飛び降りて炎に包まれる奴はＬｖが低い奴だ。

「空也さん、残りの弾はまだありますか？」

「ああ、だが半分以下だな、連射だと1分もつかどうかだ」

昇降口から現れるレベルが２０越えのゾンビたち。少数であったが武器を持ったゾンビもいた。

俺は新しく火炎瓶に火をつけ、ゾンビにそれを持たせる。

「第二波、行け！」

俺の頭には再び炎に包まれるゾンビが眼に浮かんだ。だが現実はそんなには簡単ではなかった。

「「なっ！！」」

再び投げられる火炎瓶に対し、完全に避ける奴、武器で弾く奴などが現れたのだ。

「くそっ！空也さん！！」

「わかってる！」

再び機関銃が火を噴く。機関銃の弾は易々と腐った体を突き抜け、後ろの数対にも命中する。

だが向かってくるゾンビは１０００以上。明らかに弾が足りない。

「ちっ！火炎瓶、武器、なんでもいい！投げまくれ！」

念のために持ってきたナイフや鎌、殺傷力のある工具も次々と飛んでいく。

放たれる工具や武器はゾンビを絶命させていく。だが・・・

カチン、カチン。

「ちっ！弾切れだ！」

残り２００体。対してこちらは５５体に軽装機動車に昨日、名前と使い方を教わった９ｍｍ拳銃。

「アゲハ、お前らは撤退しろ！また戦力を整えてまた来るんだ」

「空也さんはどうするんですか！？」

「こうする」

頼りない笑顔を浮かべ、軽装機動車から俺を投げ出した。

ギュルギュルギュルッ！！

そして全力でアクセルを踏む空也さん。投げ出された時から分かってましたが、やはりそうするんですね……

軽装機動車は猛スピードでゾンビに突っ込んだ。巻き込まれる約２０体ぐらいのゾンビは中を舞い、絶命。

だが神は彼を見放した。

運悪くフロントガラスに乗りあがったゾンビが強化ガラスにバットを振り下ろした。

白いクモの巣状にひび割れた窓は空也さんの視野を奪い、転倒。

そしてゾンビは軽装機動車の鉄網を剥がしていく。

「くそっ！助けに行くぞ、俺に続け！」

主人公はたった５５体の戦力で戦場を走り抜ける。

十二体め！　ゾンビと戦い（後書き）

はい、分かっております。本当に申し訳ないです（土下座）
前回あとがきで次回新キャラでる的なことを書きましたが思ったより長くなって……すみません。
次回こそっ！！次回こそです！！！

十三体め！　ゾンビと出会い

「俺に続け！」

距離は２０ｍ。ゾンビの足は遅く、必然的に俺が突っ込むような形になるがしょうがない。

パリンッ。

その時、何か白い物がゾンビの頭にヒットした。

なんだ？……チョーク？？

五階を見ると、小さな女の子がチョークを必死で投げていた。

隣にも学生服を着た生徒らしき人が机をゾンビの群れに向かい、投げた。

ものすごい勢いで落ちる机に、腐ったゾンビはつぶされ、圧死する。

よく見ると五階のそこらじゅうから何かしらが落ちてゾンビをつぶす。

そうか、五階を奪還したのか。

「物が飛んでこない所までゾンビがきたら突撃する！各自、俺の命令を待て！」

落ちてくる物にあっけなくつぶされるゾンビ。

そしてゾンビが落下物の圏外に入った。

その時の俺とゾンビの距離１０ｍ。

「進軍、開始！」

まずは先頭のゾンビの頭を金属バットでつぶす。
そして素早く引く。ヒット&アウェイ戦法だ。

先頭を歩いている奴を見つけてはつぶし、また引くを繰り返す。
３体目を倒したところで敵ゾンビと味方ゾンビが衝突した。

Ｌｖの低いゾンビは味方ゾンビに見向きもせず、こちらに向かってくるが、それを味方ゾンビが抑える。
だが、武器を持ったＬｖの高いゾンビはその武器を振り回し、味方ゾンビを撲殺していく。

ガッ！！

余所見をしていたらゾンビにバットを掴まれてしまった。だがこのバットを放すわけにはいかない。武器はたくさん落ちているが、どれもリーチが短く、腕を掴まれるかもしれない。

バットを退けようとするゾンビとゾンビからバットを離させようとするアゲハ。

「ソノ、ニク、クワセ、ロ……」

反射的にバットを放し、９ｍｍ銃を撃った。

まさか……ゾンビは話せるのか？？
ゾンビの死骸から金属バットを回収し、答えの出ぬまま次の敵を殺すために走り出す。

ゾンビと味方ゾンビが

押し合いをしている所を後ろから一撃で倒す。
ふと前世のことを思い出してしまった。体育祭の騎馬戦、あれは面白かった。2組で挟み撃ちにして帽子を後ろから取る。あの時俺は合計で7枚の帽子を取ったんだっけ。
「ははっ」
これは思い出し笑いだ。
こんな戦場で笑うなんておかしな話だ。
「さぁ、次のゾンビ（帽子）はどこだ？」

「はぁはぁ……ケホッ、これで最後、か？」
最後のゾンビが地に沈む。ふらつく足取りで軽装機動車を覗き込んだ。
そこには――
「良かったぁ……」
傷一つ無い空也さんがいた。

だが起き上がる気配が無いから気絶でもしてるんだろう。
そして救出しようとした時……
グチョ
上から机が降ってきて味方ゾンビがつぶされた。
「ちょっ！ストップッ！！机やめーーーー！ほら、お前らも正座！」
この戦闘で１３体まで減ってしまった。
また集めなければならないな。
上からの空襲が終わった所を見計らい、軽装機動車を起き上がらせた。
未だ気絶しているが、外からは開けられないので放置。
すると昇降口から小さな女の子が飛び出してきた。
５ｍの距離からじっと俺の目を覗き込む小学高低学年らしき女の子。
こちらも負けじと女の子の眼を見続けた。
じ〜〜〜
「ふぇっ……」
えっ！？なぜに泣く！？？
少女の目を見ると俺の後ろを捉えていた。
……後ろを振り返るまでもなくわかる。だから俺は前を向きながら

味方ゾンビに肘を鳩尾に食らわせた。

「グフッ……」

「愛花ちゃんっ！！」

「大丈夫か！？？」

また現れたのは高校生ぐらいの女子と男子。そしてまた俺の目を見て固まった。

……男に見つめられる趣味はないのだけれど……

あ、そっか。オッドアイが珍しいのか。

十三体め！　ゾンビと出会い（後書き）

出ましたっ！……けど会話文がッ……
次回、やっとまともに会話します。

十四体め！　ゾンビと生徒（前書き）

遅くなりました……

十四体め！　ゾンビと生徒

「いつつ……あれ？何だこの状況？」

空也さんナイスプレーです。さすがにずっと見つめ続けられるのも辛いですからね。

「お前ら……何者だ？」

髪は短めのスポーツ刈りでここ数日食べていないのか、痩せている中学1、2年の男子が小さな女の子を後ろに隠しながら話しかけてきた。

「ロリk「違うっ！！」冗談だよ、冗談。それよりお前らの名前のほうが知りたい。先に教えてくれ」

まぁこの親しみやすさから敵だとは思えないけど、確認が必要だ。

「……俺は朝日中学2年、松前（まつまえ）　裕斗（ゆうと）だ。」

思ったとおり中学生2年生、痩せ型の男がいった。

次に口を開いたのは小さな女の子だった。

「私はマナカっ！よろしくね？眼のきれいなお兄ちゃん」

……うん、癒されるね。まだこの世界にこんな癒しがあったとは……はっ！いや、別に俺はロリコンじゃ「私は月島（つきしま）　一姫（いちひめ）。この夕凪高校の生徒よ。そろそろあなたたちの名前を聞いてもいい？」

「ああ、オレの名前は白石空也。一応陸上自衛隊員だ」

「もう壊滅したんだろ？こんな世界で真っ先に大打撃をくらうのは自衛隊だしな」

「へ～、なかなか状況を理解してるね」
空也さんの格好を見てお前ら自衛隊は何やってんだ～とかお前ら自衛隊のせいで～言って襲ってくる暴徒も少なくは無かった。無論、すべて俺の配下になったが。

「まぁな、こういう無駄な知識だけは豊富なんさ～」

「っと、俺の番だな。俺は桜井アゲハ、気になっていると思うがこのゾンビたちは無視してくれ」

「「「いや無理だろ（でしょう）」」」

はぁ、またこの説明するのか・・・

「一度しか言いませんよ？これは……

……という訳です」
空也さんとほぼ同じ説明をし終えた俺は、呆然としている2人を空也さんに任してゾンビ達の近くに行った。

「え～と、Aが7体、Bが3体にDが2体、Eが1体……あ、それに家に5体か」
流石Aは俺の親衛隊なだけはある。それにこのAグループのリーダー……16Lv??Lv上がってないか?確か最後は13Lvだった気がするのだが……
まさかこいつらも俺と一緒で、ゾンビを倒してもLvが上がるのか……?

よし、ちょうどいいのがいるから確かめてみよう。

校庭には足が失われ、腕の力だけで向かってくるゾンビが複数。

「残りを殲滅しろ」

……あれ?みんな困惑している。ああ、そっか。あの時は火炎瓶で倒したんだっけ。

実はゾンビたちは何故か武器が使えない。え?火炎瓶使ってた?ああ、ワンアクションなら大丈夫なんだ。火炎瓶は俺が火をつけて投げさせただけ。それなら問題ないのだが、包丁とか持たせると包丁の横でたたくわ刃のない裏で切ろうとするわ……大変だった。バットも同じでちゃんとバットを振れるのだが上からの叩きつけしかしないしたたきつけられたバットは大抵地面に当たり、使い物にならなくなる。よって殲滅しろという命令を聞けなかったというわけだ。

……1体を除いてだ。

目の前には包丁をしっかりと持ち、敵1体に近寄ったと思ったら頭を確実に刺していった。

あれ？このゾンビ何者？？

十五体め！　ゾンビと生存者会議！

結論から言って味方ゾンビは敵ゾンビを殺すとＬｖが上がった。だが明らかに人肉を食べたときよりＬｖアップの速度が遅い。

そして……ゾンビは進化する。ＲＰＧの基本として敵はＬｖが強いほうが倒したときに得られる経験値は多い。多分今回もそうなのだろう、２１Ｌｖに上がったＡグループリーダーは途中から金属バットで残りを殺していた。

ちょうど終わったのか、金属バットを引きずりながらこちらに向かってくるＡのリーダー。

ここでまた実験をしようと思う。

「お疲れ様、突然だがお前、名前は？」

「……カムイ……」

やはりか。あのゾンビにつかまったときに話しかけてきた敵ゾンビのＬｖが２１。

もしかしてと思ってやったが、わずかなら話せるようになったようだ。

そのとき、味方ゾンビが戦闘態勢に入った。

振り返ると遠くの昇降口から大勢の生存者が出てきた。

皆、味方ゾンビを見て顔が硬直するが、好奇心のほうが勝ったらしく、えっと……松前だっけ？に説明を求めていた。

「全員、あの生存者たちに手を出したり食べたりしたらダメだから

ね」

「「「「……」」」」

おい、返事しろよ。

午後、３時４３分。

「なるほど、食料が無いと」

「そういうことです」

現在は二階、家庭科室で代表者を集めて会議している。
俺の両脇に空也さんとカムイ、目の前には中校生代表として松前、大学生代表とし桐生さん（男）、大人代表として金田さん（３５歳男性）と斉藤さん（多分３０前半女性）が座っている。

「あとは人数ですが、小学生が男性２、女性１で３人、中学生が男性５、女性３で８人、高校生が男性２０、女性１６で３６人、大学生が男性４、女性５の９人、大人が男性２９、女性２１の５０人で

す」

紙に書いてあることを読む金田さん。

「大人が多い理由は朝早く感染爆発が起こったため、大人以外は行動が遅れたためだと思います」

「じゃあまずは大人を中心にグループ分けをしましょう。このあたりのゾンビは大体今日の戦いで死んだはずです。コンビにとかはもう食料が残ってないと思いますので近くの家から食料や武器を集めましょう。そしてもう一つ問題があります」

あんなに銃を連発したんだ、多分……いや、絶対に来る。

「暴徒がここを攻めてきます。俺のゾンビを使えば追い返せますが完璧にとは言えません」

多くの生存者との合流。主人公は生き残るために頑張り始める。

十五体め！　ゾンビと生存者会議！（後書き）

次回は登場人物紹介です。そして・・・！テスト期間突入しました。
なので・・・更新速度がアップします。（キリッ）
アカテン？なんですか？それ。

登場人物紹介！（前書き）

はいっ！前回の後書きの予告どうり、主人公抜きの登場人物紹介です。
登場が早い人順に書きます。
それと若干ネタバレが含まれますので、ご注意を・・・

登場人物紹介！

神（カミ）

・初登場時
　プロローグ

・主人公をこの世界に転生させ、力を与えた張本人。
いろいろと謎に包まれている。

神里（カミザト）　神威（カムイ）

・オリキャラ提供者
　威風様

・初登場時
　２体め！

・主人公が１番初めに仲間にしたゾンビ。Ａグループリーダーを勤めている。
威風様作のＩ，ｍ　ＺＯＭＢＩの主人公。

白石（シライシ）　空也（クウヤ）

初登場時
九体め！
・一人称
オレ
・陸上自衛隊一等陸士。後輩に人質として連れてこられた所を主人公が救出。優しい性格だが、その反面敵には容赦しない。当たり前に、銃器関係に詳しく、いろいろと教えてくれる物知りさん。かなりの握力から繰り出すアイアンクローはゾンビにも有効。容姿は１８７ｃｍ。２０代後半ぐらいで黒髪短髪。顔は中の上。

朝霧（アサギリ）　愛花（マナカ）
・初登場時
十三体め！
・オリキャラ提供者
ＢＸ２様
・一人称
マナカ
・小学２年生の女の子。細身で身長が小さく、その体でいろいろと仕事を手伝う姿は男性陣いわくとても癒されるらしい。

月島（ツキシマ）　一姫（イチヒメ）

・初登場時
十三体め！

・オリキャラ提供者
ＢＸ２様

・一人称
私

・高校１年生な女の子。スレンダーな体系で身長は１４０ｃｍ。頭が良く、ある事が原因で引きこもってしまい、非力。前髪が眼にかかるかかからないかぐらいの長さで顔を隠している。地味だが可愛い。

松前（マツマエ）　裕斗（ユウト）

・初登場時
十三体め！

・オリキャラ提供者
威風様

・一人称
俺

・口癖

○○なわけさ～、○○ってばぁ～など。

・中学二年生な男の子。痩せ型で髪はスポーツ刈り。俊敏性、持久力がなぜか高く、そしてこの狂った世界では役に立つさまざまな知識を持っている物知りさん2号。沖縄出身。

金田さん

・初登場時
十五体め！

・大人代表として頑張るサラリーマン。

斉藤さん

・初登場時
十五体め！

・大人代表として頑張る主婦。夫はすでにゾンビ化している。実はママさんバレーの主将でスーパーエース。素晴らしいジャンプ力をみせる。

登場人物紹介！（後書き）

さて・・・まだまだオリキャラは募集中なのですよ。
このゾンビに名前を付けたい！とかこのモブキャラに名前を付けたいなどでもかまいませんが・・・モブなので出番はあまり無いし、ゾンビになる可能性もあるのでそこはご了承ください。

十六体め！　ゾンビと立て籠り（前書き）

遅くなりました・・・

十六体め！　ゾンビと立て籠り

生存者作戦会議から3日が経った。予想では暴徒あたりが攻めてくるんじゃないかな～と思っていたが杞憂だったようだ。

「フシンシャ……オトコ……ホウチョウ……イル」

カムイは他の仲間ゾンビと話せるようで、帰ってきたゾンビにいろいろと話をしては呂律が回っていない舌で報告をしてくれている。おっと、話がそれた。今の報告の内容から外に包丁を持った男がいるようだ。それと実はこれが初めてではない。三日連続でこの報告は受けているのだ。

「また同じ奴？」

コクンと首を縦に振った。

「う～ん、とても怪しいですね」

「金田さんもそう思いますか？　よく調べた方がいいですね……あ、それで食料の件はどうなりました？」

「この辺りの家は大体見て回りました。ですが一日二食として一週間もつかどうかですね、合わせて１０６人もいますから」

厳しいな……俺の周りにいるゾンビは合計で１３。半分が食料捜索班で半分が高校警護班。残る一匹はカムイでその２つの班をうろちょろしている状態だ。警護班を捜索班に投入すれば食料はより多くなると思うが、危険すぎる。包丁を持った男もそうだし、暴徒も

いつくるかわからない。

「あと……非常に言いにくいのですが……」

金田さんが困ったような顔をしている。

「どうかしたんですか？」

「あの……体育館がテロに遭いました」

はい？

「昨日のことなのですが、なんかあんなやつは信用できないとか言って……立て篭もったと言ったほうが正確ですね」

「あ～、まぁそうなるか、ゾンビ操るとかもう悪魔にしか見えませんしね……」

乾いた笑い声が教室内に響き渡る。

「それで、大方の大人は立て篭もりに参加してしまいました。数えたところ、大人が５０人中３８人、大学生が９人全員、高校生が３６人中１２人、中学生が８人中２人、小学生が３人中１人。合計で６２人が立て篭もりに参加したようです」

「こっちは半分以下の４４人か……ああ、問題がさらに増えた……」

問題は沢山。早く平和に暮らしたいものだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2023t/

歩く死者に囲まれて

2011年8月17日11時30分発行